

山川方夫全集

第二卷

小説Ⅱ

冬樹社

山川方全集
第二卷

昭和四十四年五月二十五日 第一刷発行
昭和四十九年八月三十日 第三刷発行

著者 山川方夫

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二一八

電話 二六四一〇三四六 一〇一

振替 東京七七五七

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二一二

製本所 一重製本加工所

東京都中野区本町五一二七一九

装幀 山川みどり

写真 ©朝日新聞社出版写真部

目次

演技の果て	5
その一年	59
帰任	124
海の告発	206
画廊にて	285
にせもの	323
ある週末	369
海岸公園	403
軍国歌謡集	457
解説	525
金子昌夫	

山川方夫全集 第二卷

小説
Ⅱ

演技の果て

日ざかりは光が眩しかったが、いつのまにかなまあたたかい初夏の宵にかわっていた。かすかな風も出てきて、街路を歩いて行き、見上げるとまだビルの上にうす青い晴れた空がのこっていた。

「すてきだったわ、今日は」私が足をとめると、つれの女は腕をときながらいった。

「とくに、君の食欲がすてきだった」

「あれは、ソースがよくできていたわね、仔牛のカツ」

頬の肉の厚い女はのんびりいい、目を光らせて塗りなおしたばかりの唇で笑う。「それでね、それで私、おかわりをしたのよ」女の口調には東北ふうのアクセントがある。わざと上品ぶって標準語をしゃべろうとするので、語尾があがる。商売がら、私は訛りについてはうるさいのだ。だが、私はなにもいわなかった。もうその女はいらなかった。私は、彼女と二十時間ちかくいっしょにいたのだ。

放送局のビルの前で私は女と別れた。背の高い女は石の舗道を五六歩そのままの方向に歩いて行き、

くるりと廻れ右して私の前をそしらぬ顔で駅の方に引き返した。彼女は駅の向う側の喫茶店にづめてゐる。淡い水いろのタイトの尻をふって、首をしゃんとあげて歩いて行く若い女には、ながい時間私とだけいた痕はどこにも見えなかった。私はひどく快い気分で昇降機の前に歩いた。

女たちについては、私はちかごろはその皮膚のことしか考えない。皮膚をこえた部分、私に見えない部分について思いたすと、私はいつも途方にくれ、結局は立ち往生をとげてしまう。私は、ぶつんと糸を断つように別れたいがために、けんめいに女へのその戒律の実行を心がけていたのだ。

七階の、廊下のつきあたりの本読み室は窓がなくて、そこには夜と昼の区別がない。黄いろい防音壁にかこまれた四角い部屋はボール箱の中のようにで、壁にはめこまれた時計が午前か午後かわからない六時ちかくを指し、部屋はつけっぱなしの螢光照明がまぶしかった。

ドアをあけて、私は人びとが急に沈黙したことをかんじた。中央の細長い粗末な板のテーブルに脇をつくと、ちんばのその脚がかたかたと床に慄えた音をたてた。まだその音が消えなかった。ざわめきを中断した人びとを代表してのように、佐伯が一語一語はつきりと区切りながらいった。

「マリがね、マリが、今朝、中野の家で、睡眠薬を二箱飲んだそうです」

それが私が真理子の自殺のしらせをきいた最初だった。俳優たちは異様に凝縮した静けさをまもりながら、思い思いに金属の椅子を壁ぎわにならべてゐる。二三人がぼんやりと私をみつめていた。保井真理子は私の昔なじみだった。彼女は、その夜出演する予定の私の番組のタレントの一人だった。

「さっき、プロデューサーの佐藤さんに、マリの旦那さんから電話があったそうです。ぼくたちも、

それではじめて知ったんです」

「死んだの？」と、私はいった。私は、ほとんど腰をぬかしていた。

「いいえ、まだ」老け役の女優がいい、あわててつけ加えた。「だから、たすかるかもしれないわ」私は大きく胸をそらせ、椅子の背に片腕をまわしながらゆっくりと足を組んだ。じつは、立ち上ろうとした動作のかわりにそれをしたのだ。煙草に火をともした。駆けつけたところで、と私は思いなおしたのだ。

「発見がずいぶんおくれたっていうじゃないか。きっと手おくれだよ」

同じ劇団の若い男女たちは話しだした。「昼すぎになってから、ばあやさんが、あんまり騒がずいんで気がついたっていうんだから」

「胃にすっかり吸収されているよ。そしたら駄目にきまつてるさ」

「でも、どうしても死ななければならぬどんな理由があるのかしら。マリ、昨夜だってぜんぜんいつもと同じだったわ」

「だれか思いあたることあるかい」

「久保さんは、どうです」

一人が私に声をかけた。私は首をふった。私はなにもしゃべりたくなかった。

人びとが取り沙汰する自殺の理由などは、どうでもよかった。私は真理子が助かるのも、助からぬのも思っていたのではなかった。そのとき、私はほとんど真理子について考えていたのではなかった。

私は、暮れかけた街に早くもネオンや明りが点りはじめ、さわやかな風が街路樹の梢をかるくこだまさせて渡って行った風景、何も知らず私が感覚に触れさせてきた今日の時間を思い出そうとしていた。私はその日、朝をしらなかつた。ホテルの窓から見えた踏切りの黄と黒のだんだんに塗り分けられた竹竿、赤い化粧瓦の上を這っていた一匹の黒い大きな蟻、午後の染まるように美しく晴れた青空。だが、といってそれらは特別なものでもなく、それらが意味をもち私に集めてくることもなかつた。それらは真理子の存在も不在も証しているのではなかつた。それらは、すでに無意味な遠いなかの形骸であるにすぎず、そして私には、同様に真理子もかすかに外見を遠望させている一つの風物としてしかとらえられなかつた。私は、舗道に硬いヒールの底をうちつけるようにして歩いていたさっきの女さえも、もはやとりたてて思いうかべてみるができなかつた。私は膜をへだてたように、他人の生も死もなまなましく感じとれず、私は遺棄されたように独りだつた。——これは、この部屋のせいかもしれない、と私はいらいらして思った。たしかにその部屋は、風から、季節の青空から、太陽から、街のざわめきから、日常の世界から隔離されて、宙にうかんだ真空の箱のように、息苦しく空中で閉じられているのだった。

ドアがひらいた。ストッパ・ウォッチをバンドから吊した佐藤が、台本をもった小柄な若い女の肩を押すようにして入ってきた。人びとの視線を避けるように目を伏せ、ドアを閉めて、大男の彼は若い女の肩に掌をのつけた。

「この人に、マリの代役をやってもらう。劇団の高野君、高野ユカリ君です」

彼は自分の武骨な手をみるように首をまげた。もちまえの、太い声があった。「マリは、死んだそうだ。いま、電話がかかってきた」

「信じられないなあ」佐伯が、間を置いてから無邪気な声でいった。スタッフはだまっていた。

「昨夜、ぼく、いっしょに飲んだんだよ、新宿で。平山もいっしょだった。ね、平山？」と佐伯はいった。「さて、そろそろ帰らなくちゃあ。旦那様がかawaiiそう、なんていってね。ぼくたちはそこでみんなばらばらに別れたんだ。ぼくには計画的とは思えないよ」

「だって、発作的なものにしたって、マリにどんな理由がある？ 死ななければならぬ」

さっきの真理子の母親役の女優が、へんに挑みかかる口調でいった。「かわいそうに」彼女のすすり泣きは、しのび笑いのように聞こえた。「あの人は、いつも一人ではさびしい人だったわ。だれかがいると、それがだれでもぱっと明るくなり、強くなるの。私は、どうしてあの人を私たちが死なせちゃったかと考えると……」

「とにかく理由なんて考えるのはやめろよ」平山がはじめて口を出した。「遺書もなかったんだろ？ マリにしても、わかってもらいたくもないのかもしれないしな」

「ひどいことを」女優は憤った目で平山をみつめた。平山は不機嫌に黒のベレをいじっていた。女優はなにもいわなかった。

「……なんだか、腹が立ってきちゃった」と私はいった。「友だちの自殺は、これで五六度めだけど、おれはいつも腹が立っちゃう」

無言のまま佐藤が笑いかけた。私も微笑して目をおとした。私は思っていた。おたがいに、我慢をして生きていたはずじゃないのか。あばかれたおたがいの無力さ、そして抵抗のしようのない空白感。おれはそれが過ぎて行くのを、じっと待っていなければならぬ。

「おれと久保が、いちばん古い友だちなんじゃないか、このなかで」

佐藤は幅ひろいナイロン・ジャンパアの肩をゆすった。「マリがまだ英文の女子学生のところだったからなあ、思えば」

そのころ佐藤と私とは仏文で、真理子は経済の同じ学年にいた保井進と結婚した。みな同じ大学の演劇部での仲間だった。人形劇の道具をかついで、伊豆半島から元気に東京都の島めぐりをした夏もあった。「あれだな、これで芝居につながったことをやっているのは、またおれたち二人きりになったな」と佐藤はいった。真理子は卒業後まる一年ほどは芝居からはなれていて、二年前、佐藤にせがんでまた現在の劇団で芝居をはじめたのだ。

「ばかなやつちゃ」佐藤は深刻な顔でいった。

どっちかといえば、マリは好きだったなと私は思った。小柄で、首すじの白く清潔な女だった。鼻ぺちゃで目の間隔がすこし広く、美人ではなかったが純真で健康な感じで、一二度ふられた舞台での役もそんな娘役ばかりだった。芝居はうまくなかった。すぐ夢中になってしまふ性質で、だが、ほんとに好きだったらそれも可愛く思えるのだろうか、あの少女っぽいロマンチックな自己陶醉癖には閉口した。酔っぱらうと木でも電柱でも、高いところに臆せずよじのぼって、知っているかぎりの歌を

気分をこめて歌いまくるあの癖、澄ましかえって童謡舞踊をおどりだすあの癖。私はいつか意地わるく、マリは芝居より芝居ものの生活の方が好きなので困る、と冗談めかしていった記憶がある。それとあの一本気な、おしつけがましい親切と議論好き。マリには、どこかひどく分別くさい勝気な女子高校生みたいな面もあって、在学中に保井と結婚したのも不似合いなことではなかった。二人のロマンスはメーデー事件から生れたというのだったが、私はデモには行かなかった。

佐藤のつれてきた局の専属劇団の若い娘は、片隅で台本の上にかがみこんで、熱心に手を動かしつつづけている。よくみるとちびた赤鉛筆を掌のなかに握りこんで、彼女は台本のうらに睫のながい人形の漫画をかき、細く白い指に力をこめ、その唇を塗りつぶすのに熱中していた。「あれで行くぜ、作者」佐藤は私に目で合図をした。「案外にイカす子なんだ、歌もちょっとなら歌えるしな」

「歌なら、私だって」母親役女優は不機嫌をかくさずにいった。「私が、マリの代役をやるのは、できない相談なの？」

私は嫉妬をあからさまにして若い娘を睨みつけるその女優にすこしびっくりした。真理子の役は主役だった。

「そろそろリハーサルと行こうか」佐藤は煙草をすて、なれた態度で女優の不満を黙殺した。

「ユカちゃん、いいかい？ スタジオは空いてるかな？」

「私、みてきましよう」

専属劇団の娘は立ち上って、そのはずみでテーブルはがたがた鳴り、台本の上から赤鉛筆がころげ

おちた。娘は気づかない様子で小走りに廊下に出た。

だれもなにもいわなかった。部屋はしずかだった。固い蒼ざめたセメントの床の隅に、空になった中華ソバの丼が二つ重ねてある。みじかい赤鉛筆はその丼の前でとまった。私はそれを眺めていた。このような意味もない細かな事實は、ちょうど駅の階段にころがっているキャラメルの子箱みたいに、いつもそのときどきに氣をとめるくせに一向記憶にはのこらないのだ。私は、そのようにして見、そのようにして忘れた数多くのものの存在をおもった。私はいろいろなことを忘れてきた。

いまにこの鉛筆も忘れてしまふだろう。忘れるにちがいないのだ。思いながら私は、忘れてきたものの不気味な堆積の重みをはかるように、しばらくはじっとその赤鉛筆をみつめていた。

保井夫婦については、しあわせなのだというふうにしか、私は思ったことがなかった。私は他人たちに、こちらが弾き出されるような幸福のほかはみたくなかった。不幸をかんじるのが、私はきらいなのだ。私の関心はすべての他人たちに笑顔の壁をもとめ、その先に深入りすることがなかった。そして保井夫婦はそれまでは充分に私のそんな願望にこたえていた。いずれに關しても浮氣の噂ひとつきかなかったし、地方銀行の頭取の一人息子として、進たちの暮しはなに不自由がなかった。

その夜、私は佐藤からギャラをもらい、本番を彼にまかせひと足先きに中野の保井家へ向かった。中央線に乗り替えようとすると、私はちょっと億劫をおぼえた。その小豆いろの車内で真理子と睨みあったある日を思い出していたのだ。私はまぶたをうす赭く染めた真理子の顔をみていた。

私は、そのときは真理子に強引にひっぱって行かれたのだ。一昨年の冬のことで、満員の国電の中で真理子は大声でトン子が、トン子を、と小田富子のあだ名を呼び、恋がどうの、愛がどうの、誠実はどうのと興奮して叫ぶような声をあげた。小田富子はおなじ演劇部の仲間で、卒業後は教科書出版社につとめていた。私は四年ごしの関係だったその小田富子と、前の日にはつきりと別れていた。

その日、私たちは電車の中で、ちょっと考えられないほど羽目をはずしたのだ。スタジオからの帰り、ちょうど夕暮れのラッシュにあたる時刻で、私と真理子のあいだにもぎっしりと人がつまり、私は打ち明けたのを後悔して乗り換える駅のくるのを心待ちにしていたはずだったが、だんだんとムキになった。人びとの迷惑半分、面白半分の視線を浴び、赧くなって、つい私は上ずった同じような大声でどなった。「がさがさいうな、おれは君に相談してんじゃない、報告しただけのこったぞ」

真理子はなおいいつつた。私はやり返した。「うるさい、要するにおれは人間がきらいなんだ」「へえん」と一問ほどはなれて、真理子はいい返した。「人間がきらい？ よくそれでプラット・ホームなんかでキスができるわねえ、ひとの見てる前で。私ちゃんとしてん子に聞いてしってんのよ」「だからさ、だから、おれはよけいきらいなんだ」私は必死になつてきけんた。

けんめいに私を見ようとしてもがきながら、真理子は叫び返した。「わかんないわ、なぜあんない人と別れるのよ、あんたもばかね、よっぽど」私は、完全に逆上した。「どうせおれはリコウじゃない。でも、ばかはばかにに、真剣に考えた挙句なんです。おれだってこの二三日、ろくに寝てないんだ」